

ナマクワランド紀行 「やらせ」「仕掛け」

15期 舟田 節子

ステンレス兎の現代彫刻に、オークションで100億円の値段がついた…が話題になっています。

もちろん話題になることを前提にしての、金額なのです。報道されるほど、現代アート業界でのあらたな購入層の開拓が期待できるわけですから。

「現代アート業界が一丸となって、若い才能を育てていくのだ」…と、業界人がコメントしていましたが、まさに、業界一丸となつての錬金術です。

こういうのは、「やらせ」とか「仕掛け」ともいいますね。

マグロや、果物の初競りにも、食べ物とはいえ、法外な値段がつき、それが報道されることによって、宣伝効果が生まれていきます。高額を払っても、お店は十分にペイするわけです。

たかがステンレス造形、たかが食べ物に、実体以上の値段がついても、誰も「王様は裸だ！」とは言わない。目論見通り、話題になり、仕掛け人は、してやったりになる…。

ムムム、不愉快だ！！



植物区の中で最小のケープ区
(ケープタウンにて 2019年8月23日)

「民」とは、「黒目のない目と針を組み合わせて、針で突いて目を見えなくした奴隷を表した字です。のちに、「無知でものごとがわからない多くの人々」「支配されている人々」の意味になりました。現在は「一般の人々」の意味です。

最近、ますます、この意味の通りになってきた

ようです。誰もが、スマホの画面に釘付けになっている。スマホで、「賢くなった錯覚」を持ち、匿名で発信して、一人前になった気になる、それでいて、評価を気にする…。

そんな評価が、意図的に操作されている…が、今度はニュースになっています。やらせレビューというのだそうです。

元々、公平に投票されていると考える方がオカシイと、へそ曲がり気味の私は思ってきましたので、わざわざニュースになったことの方に驚きました。

そこまで、みなさんは、今の情報システムが公正だと、思っていたのでしょうか？「新しい=善」として、疑わなかったのでしょうか？

これまでも、民主主義の名のもと、圧力をかけて投票させるとか、何度も重複投票するとかの裏工作で、「地元の〇〇 十選」などが、選ばれてきました。今の電話アンケートや、選挙の出口調査も、公共報道できるレベルの裏付けはないのに…と私は思っています。

フェイスブックだってそうですね。「実名で登録しているから、安心」と答えられた時には、何を根拠に？と、啞然としました。そのうえで、「あなたの分も登録しておいてあげた」を聞いた時には、絶句です。安心と答えていながら、真逆のことをやっている。それでも自分は親切だと思い、新しい世界にチャレンジしているし、「トモダチ」の輪を作っていると高揚している…。やれやれ…。
一国の大統領が、ツイッターで発言する…これも、目が点になることです。それに世界のマスコミがピンピン反応するから、なおのこと、調子に乗るんでしょうね。(臆することなく発言できる日本に生まれたことに、感謝！)

彼には、大国の代表者であるという真の自覚を持ってほしいし、一方マスコミには、これは公共の場での責任発言ではない！という毅然とした態度をとってほしいです。

これらのことに立腹する根本原因は、自分が加齢したからかもしれません。どこを向いても「ああ、幼稚！」と感じてしまいます。自分が確固たる基準を持っているとまでは思いませんが、現在の「情報過多」を、私は「ほぼ攪乱」と受け止め

るようになりました。あらためて、「百の情報、一体験に如かず」を心しています。

さて、この夏、南アフリカ共和国のナマクワランドに行ってきました。「砂漠に奇跡の花園が出現！」とされる地です。

スピードや標高にこだわれなくなって、今は花追いで、「フィールドに出る」を維持できればいい…になっています。花探しは、ゆっくりでないとやれません。これが、遅くなった足とつけた折り合いです。ことに、北陸の場合、雪解けの花を追って標高をあげていけば、夏山にむけてのグレードアップが、楽しみながらやれます。

かつて、海外の山トレッキングは、日本にはない標高に立ち、日本では見られない氷雪地形を見るのが目的でした。そうすると、ポーターが主な荷物を運んでくれるにしても、加齢によるハンディは大きく出てきます。それで、海外についても、かなたに秀峰を眺めながら、中腹の花を楽しめるようなコースを物色するようになりました。

その路線でいこうとすると、北半球の場合、6月下旬から7月上旬が花の最盛期になります。一般的には9月上旬まで、次々と開花していくわけですが、その頃には草丈は間延びし、背景の秀峰の雪は減り、日差しは陰り…となり、やはり、初夏が一番の花の狙い時です。

でも、まだしがみついている職種の場合、期末テスト時期に重なり、ああ無常！と、悶々。ところが、南半球のナマクワランドの場合、春に相当する、8月中旬から9月上旬がベストとなっています。それなら、夏季休暇の終盤に丁度となるわけです。

私の場合は、行ける時点でのベストを探し、それで納得しています。憧れを先にして「行けない」になれば、かえってストレスの種になります。その時点での、青信号が並んだ先にあるツアーが、その年の行き先になるという順。これも、ストレスを溜めない、加齢の知恵です。

ベストであるなら、航空運賃が高い時期だけだなあ…にも諦めがつくのです。

その航空運賃について、参加可能なツアー間（これも煩惱防止のため、2社のみカタログに限定）での、エコノミーと、プレミアムエコノミーの差がわずかでしたので、初めてプレミアムエ

コノミーでの参加となりました。ところが、別パンフレットではビジネスクラスも募集しており、結果、ビジネスクラス客の方が多いというツアーに紛れ込むことになってしまいました。



ライオンズ・ヘッドとロベン島
(ケープタウンにて 2019年8月23日)

「南アフリカは3回目」とか「これで、142か国目」などという驚愕の「場違い話」の方は、私的紀行のメインテーマにしました。ただ私にとっては、カラパタールやキリマンジャロの方がもっと憧れの頂きであり、夢を叶えていたわけですから、気楽に、「凄いですねえ」と応答していました。

昔も、「行ってみたら、絵葉書と同じだった」の感想は笑われたものでした。五感をフル回転して、現地体験をしないと、使ったお金の価値はできません。

その点では、ググったとしても、観光地については、誘客の都合があり、ベストシーズンのベストシーン情報ばかりが載っているのは同じです。

こんな時代の紀行は、なおのこと、そんな表(=綺麗ごと)には出ない側をしっかりと見て、自分にはこう見えた…である方が、多少は伝える意味があるということになります。

さて、「砂漠に奇跡の花園」は、たいてい、オレンジのナマクワデイジーに埋まる景色が、出ています。砂漠に3週間だけ花園が出現し、開花結実した後は、また砂漠に戻ってしまう…を、「奇

跡」と表現しているのです。

なぜ、そうなるのか？

まず、世界のバイオームは、気温と年間降水量で12区分し、「熱帯多雨林」「雨緑樹林」…「サバンナ」「ステップ」「ツンドラ」「砂漠」などと表示します。

対して「植物区」は、植物相を6区分したもので、地続きのユーラシア、北米などは、大きく「全北区」に入ります。さらに「新熱帯区」(＝中南米)、「旧熱帯区」(＝アフリカ、インド、東南アジア)、「オーストラリア区」(＝オーストラリア)、「南極区」と分けられ、最小区分として「ケープ区」があるのです。

「ケープ区」は、砂漠地帯で周囲と隔絶されているながら、大西洋の冷たいフォークランド海流で生じる靄や、冬のわずかな降雨によりもたらされる水分があることによる小灌木主体の植生です。9,000種の植物があり、うち、7割が固有種といわれています。

ちなみに「ルイボスティー」はカフェインがなく、VCが豊富とあって、女性に人気ですが、南アフリカ特産で、クランウィリアムス周辺でしか自生しない珍しい植物のお茶です。「赤い低木 (Red Bush)」を語源とし、常緑灌木そのもの…ケープ区を代表する植物の一つです。先住民のサン族(かつてのブッシュマン。ブッシュマンは差別語となり、使えない)が、昔から薬草として重宝していたそうです。

2004年に、「ケープ植物区保護地域群」として8つの保護地域が世界遺産に登録されました。テーブル・マウンテンの南側斜面に広がるカーステンボッシュ植物園は、学術研究も行っている本格的な植物園です。今回のコースの中で寄った、グーキャップのヘスター・マラン・ワイルド・フラワー庭園も、キヴァーツリーや多肉植物を展示しています。これらが、「ケープ区」を知るための本命の施設です。

自分でも、簡単な英字パンフレットを買い、また、厚い図鑑風を見せてもらいました。さらには、国立公園内の展示も見ました。それらは、常緑灌木系をメインとし、デージー系は、添え物でしかありません。



植物園のキヴァーツリー

(グーキャップにて 2019年8月26日)

少なくとも、「ケープ区＝奇跡の花園」ではありません。「奇跡の花園」はケープ区に入っているゆえの現象ですが、さらにヒトの手が入ったうえで生じている花園といえます。

今回の花巡りは「ウエストコースト国立公園」(約32,000ha)、「ニューポートビル国立公園」(約115ha)、「ナマクワ国立公園」(約140,000ha)、「グーキャップ自然保護区」(約15,000ha)の4箇所でした。

これらが並ぶ国道7号線は、フラワーホットラインと呼ばれ、地元民も花の季節には、ドライブを楽しむそうです。

そんな「ナマクワランドの花」情報が、カタログで目につくようになったのは最近。日本におけるの初情報らしきは、福音館書店発行の「月刊たぐさんのふしぎ 2015年11月号 神々の花園」ではないか?と思います。

その本に一番掲載されていたのが、「ニールさんの放牧場」でした。特徴的な立木が確認でき、ニューポートビル国立公園のメインの畑がそれだと判りました。

なんと、柵の中だけの花園です。花もややまばらに、高茎系になっていました。

もともと、奇跡の花園の出現は、その場所に7月(冬)に降雨があったかどうかによって左右され、咲かない年もある…とされています。だとしても、柵の中だけに雨が降る…などはありえません。あの本の別天地のような花園の写真は、ニール氏が

放牧をやめた途端、デージー類が進出してきて、一時的にできたもの、そして今は灌木を排除しながら柵の中だけで維持している光景だったわけです。

ワングルのみなさんなら、湿原が乾燥化して、草原に、さらに低木林に「遷移」していくのは、実体験として知っていることですね。

こちらの本来の植生は、常緑の低灌木です。それらが牧場経営で一掃されて、さらに放置された後、まずデージー類が進出してきて、奇跡の花園を形成したわけです。

もし、本の記述通り、天然状態でも、1平方mに15,000個の球根が見つかるくらいなら、人為的な柵の外も花園であるはずですが。柵の内と外（ただの草原）で明らかに違い、柵の中だけ花園状態を、どうして、神業と称することができるでしょう？ 付近の、花に埋まる街も、よく見れば、花に埋まる庭と、埋まらない庭があり、明らかに、人為といえる差が認められました。

あまりに有名になり、国立公園に昇格させて維持し、観光客を誘致している…ようです。

（という説明は、聞けませんでした。日本のツアー会社にとっても、商売なのですから）



デージーとオリックス
(ナマクワランドにて 2019年8月26日)

次のナマクワランドは、もっと広大でしたが、そこも明らかに牧場の跡地でした。

結果的には、開花時期を「当てた！」になりましたので、それは非常に嬉しかったのです。ただ、「当てた」お蔭で、同じようなオレンジの平原は、またはるかむこうに、区画としてあるだけ。同じ

気象条件であるはずの周辺が、花園にはなっていないことが、かえって歴然すぎるほどでした。

デージー系の、一面に咲く状態となる背の低い花が主体になるためには、灌木の一掃が必要で、それには人の手が入る…。つまり、奇跡の花園とは、「ケープ区における里山」ということです。

ちなみに、スイスのメルヘンチックな花畑は、牧草を刈り、人の手で維持されているもの。ニュージーランドの草原も、先住民が山を焼いて大型の鳥類を狩り出した…その後に出現し、移民によって格好の羊の放牧地になった風景でした。

自然と言うけれど、「奇跡の花園」なんていうけれど…人が住めそうな気候での平原は、すでに人の手が入ったうえで、さらなる都合でそうなっている…ということなのです。

日本では、三伏峠も、伊吹山も、入笠山も、今では柵の中に高山植物は囲われて、やっとな命を繋いでいます。



シャカイハタオドリリの巨大な巣
(ナミビアにて 2019年8月27日)

「奇跡の花園」という「やらせ」「仕掛け」で、誘客をしているけれど、見方を変えれば、ナマクワランドの花達は、日本よりもっとたくましい。昆虫に次いで今度はヒトを操り、エリアを広げ、延命しているのです。

「自然」は、AIを越えているのかも？！